



# 曹 植

伊藤正文注

日本財団支養

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

編集・校閲

吉川幸次郎

小川環樹

中國詩人選集 3

昭和三十三年十一月二十日 第一刷発行  
昭和三十七年八月三十日 第四刷発行

曹 植

定価二二〇円

注 者 伊 藤 正 文

発行 者 岩 波 雄 二 郎

印刷 者 山 田 一 雄

発 行 所 岩 波 書 店

東京都千代田区  
神田一ツ橋三ノ三 株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします



曹植像 傳顧愷之筆 洛神賦圖

曹子建文集卷第五

公宴

公子敬愛客終宴不知疲清夜遊西園  
飛蓋相追隨明月澄清景列宿正參差  
秋蘭被長坂朱華冒綠池潛魚躍清波  
好鳥鳴高枝神飈接丹轂輕輦隨風移  
飄飄放志意千秋長若斯

侍太子坐

宋版 曹植集

# 目次

解説……………三

## 詩

公讌……………七

応氏を送る 二首……………元

丁儀・王粲に贈る……………言

徐幹に贈る……………三

丁儀に贈る……………四

王粲に贈る……………四

丁翼に贈る……………四

情詩……………五

雑詩 六首……………五

三良の詩……………空

詔に応ずる詩（表を附す）……………六

白馬王彪に贈る 并びに序……………三

雨を喜ぶ……………七

朔風……………九

雑詩……………七

棄婦の詩……………二

七哀……………七

七歩の詩……………二〇

## 樂府

箜篌引……………二三

鬪鷄……………二七

白馬篇……………三〇

名都篇	.....	一三四
薤露行	.....	一三五
美女篇	.....	一四四
遠遊篇	.....	一四六
泰山梁甫行	.....	一四九
盤石篇	.....	一五一
野田黃雀行	.....	一五七
種葛篇	.....	一五九
浮萍篇	.....	一六五
牆高からんと欲する行に当う	.....	一六九
怨歌行	.....	一七一

吁嗟篇	.....	一七五
来る日は大いに難しに当う	.....	一七九
門に万里の客有り	.....	一八二
桂の樹の行	.....	一八四
南山に遊ばんと欲する行に当う	.....	一八七
妾薄命 一首	.....	一九〇
年譜	.....	二〇三
跋	.....	二〇七
略 図	.....	二〇七

## 解 説

### 一

歴史上、転換期といわれる時代には、しばしば、曹植そうしよくのようなすぐれた詩人が誕生する。

転換期には、よく凄惨な事件がともなうものだが、曹植が出あつた後漢末から三国にかけての時代はこれにひどかつた。人人はおのれのもつエネルギーのすべてをかけて、明日の運命のためにたたかつた。彼らはおのれを圧殺せんとする壁の存在を常に意識していたに違いない。それ故、この恐怖状態からの脱出を、他の抹殺という手段に求めたのであろう。そのように考えなければ、歴史にきざみこまれたあまりにも多くの無意味な死は、解釈できない。私には、人間のもつ限りない悪意が、狂つたように中国全土をかじめぐつたのが、この時代であると思われる。

しかしこのような時代に生まれた文学なればこそ、『建安の文学』と呼ばれて、後世の詩人たちの創作意欲をかきたてる理想的な文学となりえたのだ。だが限りない悪意を背景とするこの文学は、単に悪意への反撥を示しえたが故にすぐれるのではない。さらに、その悪意の所有者である人間そのものの把握に進み得たが故にすぐれたものとなつたのである。我我は『建安の文学』に、文学の既成概念をふき飛ばした自由さ奔放さを感じるとともに、人生の深淵を見せられる思いがするのはこのためである。そこには、ギリ



ギリの生活に抵抗する文学者たちの凄じいエネルギーの噴出があつたし、文学者なるが故にひとり醒めたまま、狂気につかれた人間のあがきを凝視しなければならぬ苦しい思いがあつた。しかもこの凝視は次には彼自身に向けられる。この意味で『建安の文学』は、余裕から生まれた文学と、著しい対比を示す。

それ故、我我は、『建安の文学』の首魁が、幾十万人の人間を殺した曹操であり、その代表選手が曹操の子の曹植であつたことを忘れてはならない。

ここで曹植に対する二つの異なつた評価を紹介しておこう。まず、六朝時代梁の鍾嶸（四八〇？—五五二年）は、詩論書「詩品」において「陳思（曹植のこと）の文章におけるや、人倫の周・孔あるに譬う」という。聖人の周公や孔子に比すべき文学者が曹植だというのだから、これ以上の賛辞はない。もう一つは、彼の生涯—皇族としての—に対して、皇室から下された評価である。彼は死後、「思」と諡された。「資治通鑑」の注者胡三省が引く「諡法」には、「前過を追悔するを思という」と見える。簡明直截ではあるが、これ以上痛烈な評価も数少ない。彼の文学と生涯の秘密は、どうやらこの二つの評価が交わるころにありそうだ。

## 二

曹植は字を子建（名と字に関連があるのは通例で、植（入声）「職」の韻）には樹立の意—「周礼」夏官、田僕—がある。なお我が国には、植をチ（去声）「志」の韻—「広韻」と読む人もいる—という。陳思王と呼ばれるのは、最後に陳（河南省淮陽県附近）の王に封ぜられ、前述の如く思と諡されたからである。

彼は漢の獻帝の初平三年（一九二年）曹操（時に三十八歳）の子として生まれた。母は卞氏。卞氏は山

東の琅邪開陽の人で、もとは倡家（歌姫）であった（「三国志集解」において盧弼氏は、当時の倡家は後世の倡伎と違い、賤業ではないという）。なかなかの女丈夫で、賢夫人のほまれ高く、「世説新語」の賢媛篇にも列せられている。第三番目の男子たる曹植を生んだ時は三十三歳で、身分は妾であった。彼女は終生、曹植を愛しつづけ、多くの影響を彼に与えている。

彼がどこで生まれたかは、はっきりしない。彼を謙（安徽省亳縣）の人というのは、本籍地を言ったままであって、謙は彼の出生地ではない。私は「魏志」武帝紀の記事により、東武陽（山東省朝城県の西）か、鄆城（山東省濮県の東）を彼が生まれた所と推定したい。

ここで、彼が生まれる頃までの歴史を簡単にのべておく。後漢帝国は二世紀の初め頃から、すでに衰えを見せて来たが、内部的には腐敗した宦官政治と、外部的には相つぐ農民暴動（その最大なものは一八四年以後の黄巾の賊の反乱）のため、急速に瓦解の道をたどった。他方、漢室の衰微に反比例して、着着進行しつづつあった地方分権化は、やがては群雄割拠の一大騷乱へと突入するきざしを見せてきた。おりもおり、靈帝の死後帝弁がたったが、董卓はこれを廢して陳留王協（獻帝という）を立て、まもなく帝弁と何太后を弑した。時に中平六年（一八九年）九月である。翌年袁紹を盟主とする連合軍が組織され、董卓を討ち洛陽を攻略したが、それで討伐を中止し、連合軍は解散した。かくて群雄割拠時代が現出した。

曹植が生まれた初平三年には、董卓が部下の呂布に長安で殺され、呂布も李傕らに追われて、無秩序な紛乱状態はますます甚しくなつて来た。一方その頃、父の曹操は袁紹の勢力下にあった。彼は黄巾の賊を破つて名をあげ、次の飛躍にそなえて、兗州（河北省西南部と山東省西北部の地域）の根拠地化に、懸命の努力を払っていた。

これから曹植の伝記をのべるにあたって、彼の生涯を四つの時期に分けて考えてみよう（以下、巻末の年譜及び略図を参照されたい）。

第一期は初平三年（一九二年）から建安十五年（二一〇年）までの十八年間、すなわち出生より、平原侯に封ぜられる前年まで。かりに名づけければ修学期といえよう。

曹植が生まれてからの曹操は、それこそ旭日昇天の勢いである。勿論幸運もあったろうが、曹操には新しい時代を築き得る資質がそなわっていた。彼はその後着着と地歩を固め、建安元年（一九六年、時に植は五歳）には、献帝をおのが勢力範囲の許都（河南省許昌県）に迎えて司空となった。これで皇帝を擁して、天下に号令する態勢を固めたことになる。建安五年には袁紹を官渡（河南省中牟県東北）に破り、建安十二年には華北の統一に成功し、翌十三年にはついに首相となった。

しかし、ここに至るまでには幾多の苦難や敗戦があった。中でも興平元年（一九四年、時に植は三歳）、呂布のため根拠地兗州を侵略された時は、覆滅の危機にさらされた。幸い荀彧じゆんゑいらの働きで鄆城及び范・東阿の二県を保つことができ、大事に至らずにすんだ。もしその時鄆城などが陥ったとしたら、城中にいた（？）曹植の運命もどうなったか分らない。それにくらべると、歴史上有名な赤壁せきへきの大敗（二〇八年）は、基礎が十分固まっていた時だけに、回復はそれほど困難ではなかった。

この時期の曹植については、余りのべることがない。「三国志」の本伝では、十歳あまりで詩経や論語・辞賦など数十万言を読みそらんじていたという。誇張はあるだろうが、彼の神童ぶりと勉学を伝えるには十分の記事である。父の曹操も読書ずきで子供に読書をすすめ、戦争に出かけても書物は手ばなさなかったので有名だが、曹植もその点では父に劣るものではなかった。明帝は景初年間（二三七—二三九年）の

詔で「少きより終に至るまで、篇籍手より離さず、誠に能くし難きことなり」と彼を称揚している。彼も「読書して万卷を破」った詩人の一人であることは十分注意してよいことだ。本伝の記載に面白いな点はあるが、文章が巧みすぎるのをあやしんだ曹操が、彼に「誰かに代作してもらったのか？」とたずねたのも、この頃のことであろう。

曹操の彼に対する寵愛ぶりは相当なものだった。彼のくだけた性格、四角ばらない態度、華美を好まぬ趣味、明敏な頭脳、いづれも曹操好みである。

父は連勝する、母は彼が五歳の頃から正夫人となった。彼も嫡出子の身分を獲得した、その生活は幸福だったに違いない。

もう一つ重要なことがある。それは彼と当時の文壇との関係だ。

建安の文壇——もっと正確に言えば、曹操を中心とする文学集団——が何時その形をなしたかは明らかではないが、曹操が家を鄴城（河南省臨漳県西）に移したと思われる建安十年（二〇五年、時に曹操は十四歳）頃から以後と推定される。もちろん、その頃はまだ集団の草創期にあたり、メモバーはそろっていなかった。この文学集団の代表的な七人を《建安の七子》とか《鄴下の七子》とか呼ぶが、そのうちの王粲・劉楨・応瑒らは建安十三年（時に曹操は十七歳）以後に参加した人人である。人材主義を尊ぶ曹操は、それこそ「天網を設けて」（曹操「楊徳祖に与うる書」）人材をかきあつめ、すぐれた文学者をおのが幕下にくわえた。しかも彼の、文学者に対する態度は、従来の君主が文学者を役者や芸人なりに取扱うのとは、全く違い、殆んど平等の資格で交際した。このような空気が、文学的才能にめぐまれた曹操に影響を与えぬはずはない。上述の、曹操の「誰かに代作してもらったのか？」との質問には、曹操と文学集団との関係

がひめられているように思う。

なおこの時期の作品と確言できるものは、現在では全く残っていない。「芸文類聚」卷五十五に引く彼の「文章の序」には「余少くして賦を好み、その尚ぶ所、雅より慷慨を好み、著す所繁多なり。類に触れて作ると雖も、然も蕪穢なるもの衆し。故に刪り定め、別に撰び「前録」七十八篇を為る」という。これは、自ら編集した作品集の序言の一部であるが、若かりし頃の文学経歴と、この時期の作品が残っていない事情を説明してくれる。

第二期は建安十六年（二一一年）から建安二十二年（二一七年）までの七年間。すなわち平原侯に封ぜられた二十歳から、曹丕側との後目相続の争いに破れた二十六歳までである。この時期の曹植は父曹操の寵愛もあって、生活的にはまだ恵まれていたが、兄曹丕との後継争いは、彼の運命を次第に暗いものにしてはじめた。

彼の事蹟をのべる前に、この時期の歴史的環境を簡単に説明しよう。曹操は華北をより堅固にするため、関中（陝西省）へ二度出兵（うち一度は曹植も従軍した）したほかは、南方の孫権と交戦状態にあった。しかし建安十九年（二一四年）に劉備が益州（四川省）を領有してからは、天下三分の形勢となり、強敵が一つ加わった。この間、曹操の位階はますます進み、建安十八年には魏公（魏は彼が支配した地域の名、公は公爵）、建安二十一年には魏王となった。

さて、曹植は建安十六年に平原侯（平原は山東省平原県）に封ぜられ約三年間その任にあった。彼の異母兄弟四人ほどが、同時に彼と同じ食邑五千戸の諸侯になっているから、彼だけが優遇されたのではない。兄の曹丕が同年に、五官中郎將、副首相となったのに比べると、両者の差は明らかにつけられている。こ

の時、彼が平原へ赴任したか否かは疑問である。恐らくは名目のみで、実際は鄴都にとどまっていたのであろう。

この三年間には、銅雀台で兄弟たちと賦を競作し、曹操からほめられたこともあったが、この事はそれほど重要でない。むしろ、硬骨漢として、また徳行の士として名声のあった刑顓（?—二二三年）が、彼づきの家丞（家老職）となり、劉楨・応瑒という当時の代表的二詩人が、前後して庶子（家老につぐ職）となったことに注意すべきである。刑顓の伝によれば、刑顓は相当手きびしく彼をきめつけたため、彼は刑顓をけむたがり、話のあう劉楨と親しくした。あまりのことに劉楨は「春の花をとって、秋の実を忘れるものだ」と彼を諫めたという。

曹植は建安十九年、二十三歳のとき、臨菑侯（臨菑は山東省広饒県の南）に転じた（以後約八年間その任にあった）。この年、策士の楊修や丁儀・丁廙（翼）らが彼の側近となるや、曹丕側と相続をめぐる抗争がにわかには激化した。主な原因は曹操の彼に対する寵愛と、寵愛から生まれた曹操の迷いである。しかし、この問題はなかなかデリケートなものを含んでいる。第一に果して曹植自身に、曹丕と争う気持があったか否かには、疑問の点がある（「丁儀に贈る」の語釈〔本書四四ページ〕でも少し指摘した）。いわゆる《判官びいき》は中国でも盛んと見え、「三国志」の著者陳寿はさすがに公正だが）裴松之が注に引くところや、「世説新語」がのせる挿話は、おおむね曹丕を陰險冷酷な圧迫者にしたてている。一一紹介するいとまはないが、それらは、本来曹植が太子となるべきところを、曹丕側が無恥な策謀の数を弄して、曹植を無理に引きずり落したように書いてある。また学者や文人たちにも、曹植びいきは多い。その代表的なのが隋の王通である。彼はその著「文中子中説」（この本は偽作との説がある）において、曹植を君子なり、

達識者なりと評し、「天下を譲った」人だとひどくほめてゐる。明の王世貞もこの説に賛成する一人で、曹植には後継を争う気持はなく、楊修ら三人が功名を貪ったのだとする。彼はまた曹植が窮地に陥ったのは楊修らのためであり、その原因は曹操の寵愛が作ったのだという（「陳思王植伝の後に書す」）。「魏志」には「植性に任せて行い、自ら雕り励まず、飲酒節あらず」という。この一文なども、わざと奔放・軽薄な振舞いをして、曹操の愛を失わせ、曹丕に位を譲ろうとしたのだ、と解釈できるし、それを裏書きする資料は「三国志」注に見える。明の李夢陽はこの見解を主張し、「三国志集解」の著者盧弼氏はこの「魏志」の一文に注して、「位を奪う謀なし」という。

しかし以上の《判官びいき》に水をかける論説もある。その最も強硬なのが郭沫若氏で「曹植を論ず」（「歴史人物」所収）において、曹植は決して「天下を譲る」人ならずと、例証をひきつつ論じているし、張徳鈞氏はこの説を支持する（「歴史研究」一九五七・二）。

こうなると判断に迷うが、事柄は、曹丕対曹植の争いよりも、側近者対側近者の権力闘争であったと思われる。もう少し明瞭に言えば、曹丕の継承が既定のコースで、曹操の寵愛を利用した楊修・丁儀兄弟・邯鄲淳・楊俊・荀暉・孔桂らが、曹植を擁して王位奪取を企て、曹丕側がそれに応戦したのが実情であるようだ。そうして結局は曹真をはじめ重臣たちの援護を受けた曹丕側の勝利に帰した。曹丕側に立った援護者のうちに、かつての家丞邢顒や、曹植の妻崔氏さいの叔父にあたる崔琰さいえんらの曹植には身近な人がいたという事は、この抗争問題をとく一つの鍵のように思われて、私には極めて興味深いものがある。

この期には、年譜に示したように、「離る思の賦」をはじめ、相当数の作品がある。彼は劉楨・王粲・庾瑒・庾亮・徐幹（「晋書」鄭袤伝によれば、徐幹は建安十九年頃、臨菑侯の文学として、曹植に仕えたとい

う)らの一流詩人と親しく交わり、作品を競い、文学論をたたかわした。時あたかも建安文壇の最盛期である。乱世の詩人たちの、沈鬱さをたたえつつも昂揚してやまぬリリズムは、曹植の詩のスケールを大きくし、また密度を濃くするのに与って力があつたはずだ。その曹植にとって、建安二十二年の王粲・徐幹・陳琳・応瑒・劉楨らの死は、さぞかし大きな打撃であつたらう。彼の「王仲宣(粲の字)の誄」には、そうした彼の心情がよくあらわれている。

第三期は建安二十三年(二一八年、時に二十七歳)から、文帝の黄初七年(二二六年、時に三十五歳)までの九年間、すなわち今までの生命力の充実をほこつた得意の時代が暗転し、忍従の生活を強いられる時期である。受難はまず建安二十四・五年に側近の楊修・丁儀兄弟が誅殺され、彼の身辺に暗雲がただよひ出したことからはじまる。この頃には、榮達を意図して近づいて来た連中がよりつかなくなつたのは勿論のこと、知人友人も嫌疑を恐れて顔を見せず、彼の身辺はにわかにならなくなつて来た。その上、黄初元年からは、これまでと違って、実際におのが封地に赴任しなければならなくなつた。当然住みなれた鄴城とも、親しい肉親・友人ともお別れだ。しかもいやなお目附役が、ついて来てきびしい監視をする。

酒もうっかり飲めない。うさばらしに酔っぱらって威張りちらしたりすると、早速お目附役に上申されて罪に問われる。彼は臨菑に行つてほどなく酒に酔つて使者をおびやかしたと、がで安郷侯(安郷は河北省正定県附近)に左遷された。かくして同年中に鄴城侯(翌年鄴城王に昇進)、黄初五年に雍丘王(雍丘は河南省開封附近)と封地を転転とする生活がはじまつた。しかも生活的には苦しく、彼の表現を借れば、「連りに瘠たる土に遇い、衣食繼がず」(遷都の賦「序」)といつたあたりさま。

王とか侯とか、聞えはよいが、その実情はひどいものだらう。「資治通鑑」卷六十九、黄初三年の



項に、「この時、諸侯王は皆寄地空名にしてその実なし。王国には各々老兵百余人あり、もつて守衛を爲し、千里の外を隔絶して、朝聘を聴さず。爲めに防輔監国の官（お目附役）を設け、もつて之を伺察す。王侯の号ありと雖も、而も匹夫に儕し。皆布衣（平民）爲らんことを思えども、得ること能わず。法既に峻切にして、諸侯王の過惡、日日に聞ゆ。」と見える。彼もきびしいおきての下で、地方長官やお目附役から、一度ならず弾劾されたらしい。彼は今や「昔は人の心を信じ、左右に忌むことなかりし」身が、デマや非難のため「身は鴻毛より軽く（吹けばとぶような存在の意）、謗は太山よりも重し」（「黄初六年の令」と嘆ぜざるを得ない境遇におちいたのである。

しかもその上、黄初四年の夏六月に不気味な事件が起つた。それは彼と仲がよかつた兄曹彰の急死である（彼の「任城王の誅」を見よ）。一説には彰の武勇を恐れた文帝が毒殺したという。境遇によつていたためつけられて鋭くなつた彼の神経は、死の影におびえはじめた。事件後作られた「白馬王彪に贈る」が絶唱と称されるのは、原因のないことではない。

なおこの期の彼に関して、曹操が死ぬまでは、曹植が世嗣となり得る可能性がまだあつたとする説と、曹丕が時には殺意をいだいて彼を圧迫しつづけた（その代表的なのが「七步の詩」の事件）と見る説があるが、何れも『判官びいき』が昂じた結果で、ひいきのひき倒しの感がある。これらの説がもとづくところは、「三国志」注や小説家の言で、信憑性は極めて薄弱である。

この期の作品は第二期に比して、著しく沈鬱悲愁の気味をおび、人生に対する真剣な思索が作品のうちにはひめられてくる。その意味では、有名なファンタジー「洛神の賦」（巻頭の写真参照）にはこの期の系列からはずれたものを感じるかも知れないが、やはり彼の憂悶の情の反動が絢爛たる詞句を縦横に駆使して